

高等学校中途退学の現状と生徒指導の課題

—外国人児童生徒における体験からの考察—

(平成 28 年 8 月 31 日提出, 11 月 4 日受理)

The Situation of dropout cases in high school and the current guidance tasks —A study based on Immigrant Students' Experiences—

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科

オチャンテ 村井 ロサ メルセデス

OCHANTE MURAY Rosa Mercedes

Nara-Gakuen university

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：外国人児童生徒, 中途退学, 異文化理解, 生徒指導

Abstract : Abstract : It is said that Japan has a 98% enrolment in high schools. However, Newcomer children enrolment reaches only half the enrollment numbers of native Japanese students.

After the lapse of more than 25 years since the amendment of the Immigration Control and Refugee Recognition Act of 1990, Newcomer children born in Japan (second generation) have gone through Japanese national schools experiencing issues related to culture adaptation, bullying, school truancy, etc.

Although the enrollment rate has increased little by little, the dropout rate is also high. This issue not only affects the future of Newcomer children but also Japan's chance to acquire a diverse and talented youth. In this paper, through interviews and field work, we analyze the factors and the causes that lead to high school dropouts of immigrant youths in Japan. Also we considered the necessary assistance and support in order to prevent a drop-outs, and the current guidance tasks for immigrant students.

Keywords : Immigrant Students, Dropouts, Intercultural Education, Student guidance

I. はじめに

日本における高等学校への進学率は 98% であると言われている。しかし、ニューカマーの外国人児童生徒の進学率はその半分に留まっている現状である。

1990 年の出入国管理及び難民認定法が改正されて 25 年以上が経過して、日本生まれの子どもたちのいわゆる移民第二世代の子どもたちが日本の公立学校に通い、日本人の子どもたちと同じ教育を受けているが、学校に馴染めず、不登校、不適応、不就学などの学業不振を経験している者は少なくない（宮島喬・太田晴雄 2005, 金井 2004）。

また、進学率が少しずつ増えてはいるものの、退学率が高く、これによって彼・彼女らの将来の可能性や夢の実現をはばむだけではなく、日本社会にとっても多様な人材を失うことが危惧される。

本稿では、高校へ進学できたにも関わらず、中途退学などのドロップアウトをしたケースを扱いながら、退学に繋がる要因は何であるか、またドロップアウトに至った原因は何であるかをインタビューやフィールドワークを通して分析する。またドロップアウトを防ぐための必要な支援やサポート、学校で行われる生徒指導の在り方と課題について考えることとする。

II. 調査対象者と方法

調査は三重県で2014年12月から2016年3月にかけて行った。

インタビューを行った主な場所は、飲食店や教会等である。またフィールドワークとして、2011年から2016年3月までに「外国人児童生徒巡回相談員」として筆者が小・中学校で出会ってきたケースについても述べることとする。

調査対象として日本の高等学校で中途退学を経験している日系ペルー・ブラジル人の若者、17歳から20歳、そしてペルー国籍の母親2人に調査を行った。他の研究のために行った聞き取り調査の事例も比較のために利用する。また今まで学校や教会で関わった小・中・高校生体験から見えてきた課題も加えている。

インタビュー項目として外国人生徒の不適応や退学などの困難な体験の課題に重点を置いているため、彼らを取り巻く学校、家庭環境や退学の理由についてなど半構造化された質問を行った。

1) 実施状況

インタビューでは、17歳から20歳の若者4人、そして子どもが不適応・退学を経験している母親2人に30分から90分の間に渡って、聞き取り調査を行った。対象者の国籍はペルーまたはブラジルである。若者に対するほとんどの調査は日本語で行ったが、母国語の方が説明しやすい時は、スペイン語、ポルトガル語で実施した。母親2人にはスペイン語で実施した。インタビューの引用箇所は四角い枠に表記し、筆者の質問の部分は斜体で、省略している内容は・・・で表記している。スペイン語で行ったインタビューはプロトコルを筆者が翻訳して日本語で記している。

III. 考察

インタビュー調査とフィールドワークで出会った

ケースから次の5つの要因が浮かび上がってきた。

それは、「学力の問題」、「進学した高校への無関心」、「高校でのいじめ」と「経済的な問題」高等学校の教育制度が十分に理解されていないことなどが挙げられる。以下、プロトコルに基づいて検討しよう。

1. 学力の問題

まず、高校を退学する大きな要因として学力の問題がある。筆者が2014年に進路について調査を行ったとき、対象者のほとんどが高校へ受験するときに、入試の壁を感じていることが分かった（オチャンテ2014）。彼らの多くは、小・中学校で学業不振を経験しているため、受験できる高等学校の選択肢が少ないことが浮かび上がった。

彼らは日本生まれや滞在が長いことから「特別入学枠制度」（入国後の在日期間が6年以内）を利用できないことがある。また、受け入れ高校では、彼らのための学習サポートも不十分であり、勉強についていけないことが多い。

対象者Bに高校での勉強はどうだったのと聞くと、

先生の言ってることが難しすぎて、内容はまったく理解できなかった。

と語った。多くの子ども達は中学校から学力の問題を抱え、高校へ受験するとき、入試の壁を感じている。晴れて合格できた場合でも、受け入れ高校では、彼らのための学習サポートは不十分であり、勉強についていけない。宮島喬は次のように指摘している。

「高校での日本語指導、学習支援は引き続き継続されなければならないことである。むしろ、これはいっそう重要な課題となるとさえいえる。授業についていけなければ、それは中退を結果しやすく、その時点で当人の社会的位置を半ば決定してしまうからである。」（宮島2014）

表1 調査対象者

事例	性別	国籍	年齢	来日年	職業	最終学歴	将来の夢
A	男	ペルー	20	日本生まれ	非正規雇用	高校中退	パソコン・情報化の勉強して資格を取る
B	女	ペルー	17	1歳	非正規雇用	高校中退	通訳
C	女	ブラジル	17	日本生まれ	無職	高校中退	色々な外国語を覚える
D	男	ペルー	20	日本生まれ	建設業	高校中退	鳶職人の親方
E	女	ペルー	50代	1991年	製造業	中等教育	――
F	女	ペルー	50代	1991年	製造業	中等教育	――

高校での必要なサポートを受け入れず、もともと苦手だった科目についていけない。入試に合格できたとしても、小・中学校で抜けている部分が多いことや、小・中学校で受けていた取り出しの補習や放課後のサポートがなくなり、高校での勉強を難しく感じて、勉強が嫌になり、このことから中途退学をする若者が少なくない。

2. 進学した高校への無関心(将来への展望のない進学)

二つ目として、進学した高校への無関心が挙げられる。これまでに挙げたように、進学する高校への選択肢が少ない、または学力に問題を抱えているため、多くの若者が高校を選択するとき、安定を求め不合格になるリスクを避ける戦略を取っている。そのため、入りたい高校を受験するより、入れそうな高校を受験することの方が多くのではないか。

母親 F の体験を聞くと、

子どもが別な高校に入りたかったけれど、前期選抜試験でだめになって、先生は希望高校を変えた方が無難と言われ、変えました。でもその高校でいじめに合っ
て高校を辞めることになった。それですごく後悔した。次の子どもの時、前期はだめだったけど、主人と話を
して、浪人になってもいいけど彼の行きたい高校に行
かせようと思って、後期選抜も同じ希望高校を受験し
たら合格した。先生には難しいといわれたけれど、私
たちは彼の意思を尊重した。塾に入って頑張っ
て合格した。

と語った。

筆者は上記のお母さんのような体験をよく聞いた。実際学校の現場で保護者と学校側との面談に入ることがあるが、生徒の成績や模擬試験での点数と希望の高校の偏差値との間に差があり、ほとんどの場合、希望校への合格は難しいと教員が保護者に伝えていた。塾などの支援を受け、それでも、志望校に挑戦する者もいたが、多くの場合、合格の確率が高い高校を選択することが多い。最初は全員高校に行きたいため、合格した高校へと進学するが、途中で思っていたような高校ではないから、面白くないから、また荒れている学校で自分に合わないからという理由で退学する若者もいる。

対象者 C さんは希望の高校に進学できず、地元から少し離れた高校に合格できたが、退学した。彼女が自分の体験を次のように語っている。

高校に入るのは楽しみだったけれど、思っていたような雰囲気ではなく、結構遊んだりする、不良の人が多かった。・・・地元から遠い高校であったため、お母さんに送り迎えを頼んだり、電車に乗ったりしていたけれど、私も学校から早退したり、その仲間と遊んだりしてしまいました。・・・お母さんにもよく怒られたりして、高校には行かないことにしました。

進学先の学校は荒れており、母親の目の届かない所だったから、遊んでしまって、早退、欠席することが多かった。このことから母親から高校を辞めた方がいいと言われ、休学してから退学した。

また大きな要因として挙げられるのが、将来への展望がない進学をしていることである。彼らの周りに大学生や社会人としてのロールモデルの存在が少なく、単純労働以外の多様な職業を持つ者が身近に少ない。そのため将来の夢はなにであるかと聞くと多くの場合は「モデル」「サッカー選手」「フライトアテンダント」のような決まった職業しか挙げられず、多様な将来の夢を描けない環境にある。

渡辺他(2014)は「彼らが将来の夢を思い描く時、現実的な夢として見るができるような仕組み、将来への展望を与える活動」が極めて必要であると指摘している。

3. 高校でのいじめ

ここでは、母親が語った二つの事例を紹介する。子どもが高校1年生で中途退学した母親 E さんの語りを見てみよう。

高校に入って嬉しそうだったけど、半年後様子が変わって、攻撃的になって、早退したいから迎えに来てと言うようになった。知り合いから Line の書き込みで死にたいと書いてあるのを知らせてもらい、彼の様子を意識するようにしました。ある日、急いで迎えに来てと昼間に電話をもらって、学校の近くに行くと、半分裸になって駐車してある車の後ろで身を隠していました。

4 回学校に行って、いじめを訴え、証拠写真も持っていったけれど何も変わらなかった。こういう場合警察に行った方がいいことも知らなかった。

それで、もう学校に行かせないと決めました。彼はその後安心するようになり、またおだやかになった。・・・家に1年間いたけれど、知り合いから外国人児童生徒のための就学支援教室があると聞いて、そこに行くのが好きになって高校に入りなおした。・・・今は18歳で高校の1年生です。

最初は嬉しそうだったけれど、いじめに合って態度が一変して、母親が問題に気づいたが、学校側の積極的な対応が見られず、親がもう学校に行かせないと決断した。子どものことが不安になり、子どもを守るために高校を辞めさせる決断をすることになった。

また母親Fの語りでは、子どもが小学校からいじめを受けた経験を語った後、高校を退学するという結論に至ったケースがあげられている。

高校では辛いことが多かったはずですが、彼はいつも大丈夫と言っていました。高3のある料理実習のとき、ある子がひどく彼に辛くあたり、彼が嫌になって、持っていた包丁をその子に向けた。それを先生が目撃して、校長先生のところに連れ出して、2週間の出席停止処分を受けた。彼をからかったりしていた子には処分はなかった。出席停止処分を受けて、挫折して学校にもう行きたくないと言いました。今まで問題を起こしたことない真面目な子だった。担任の先生も泣いていたけれど、何もすることができなかった。・・・高校を卒業後、料理の専門学校に行く決めて、色々な専門学校を見に行っていたのに、3年生で高校をやめることになってとてもショックだった。・・・二人を出席停止処分にしていたら、まだ理解できたけれど、今までよく頑張っていた私の子だけ、外国人だからだと思うけど、出席停止処分になった。その後、色々な親戚と相談して、彼の行きたい料理の専門学校(大学)はペルーにもあることを知って、ペルーに帰って、スペイン語はよくできなかったので留学生としてシェフになるため専門学校に入りました。・・・今はとても楽しく、向こうで頑張っています。卒業してから、ヨーロッパに留学したいとも言っている。

この両方のケースでは学校からの対応がなかったと訴える。一つのケースでは、友達から就学支援教室のことを知って、新しい高校へと入学できた。もう一つのケースでは、親戚と相談して、母国に帰る決断をして、挫折を克服できたケースである。しかし、それがなかったら、人生において大きなダメージと心の傷となる。

いじめは日本社会においても大きな課題であるため、外国籍児童生徒に限った問題ではない。しかし、どのような対応をしたらいいのか、誰に相談したらいいのか分からない外国籍の保護者が多いようだ。母語でのいじめなどの相談窓口がなく、また子どもたちへの支援のあり方や親子関係に悩む保護者へのサポートも少ない。

4. 経済的な問題

もう一つの要因として経済的な面がある。対象者Aさんは、高校を退学した理由として、

親の仕事が減り、もう年を取っている親を助けようと思って通っていた定時制高校を辞めました。

と語った。

インタビューした青年のほとんどは給料の一部を家に入れている。外国籍の親のほとんどの場合、非正規労働者として工場で働き、雇用条件が厳しく不安定な状況にある。中には離婚や母子家庭で貧困であるケースも少なくない。

対象者Cさんの語りでは、

母子家庭で、お母さんは一人できついで、学校をやめて仕事しようと決めました。・・・体調を崩していて、勉強と仕事の両立はできなくて、仕事を選びました。

と語った。

オチャンテ(2010)では、三重県のドロップアウトしたブラジル人の若者に調査した結果として、日本の公立学校における日本語習得の課題や日系南米人の親の不安定で不規則な労働生活への支援の限界などが原因としてあげられると述べている。

「デカセギ」として来日した日系ペルー人およびブラジル人の保護者はほとんどの場合、非正規雇用として不安定な立場で工場などでの重労働をしているため、お父さんやお母さんを助けたいと思う子どもが少なくない。親のその姿を見ると、自分も早く働かなければという思いに繋がる。これに学校での勉強についていけない、また関心を持ってないことが重なると、すぐにでも中退して働いて親を助けようという思いが強くなる。このように、高校を中途退学する大きな要因には、経済的な問題があるのではないだろうか。

5. 高等学校の教育制度が十分に理解されていないこと

義務教育と異なる高等学校の教育システムを十分に理解していない保護者が多いのではないかと考えられる。筆者が三重県内の高等学校教員二人に、退学する外国人児童生徒について相談したところ、「保護者は小・中学校の教育と高等学校の教育制度が異なることを理解していない。また同じようなシステムであると勘違いしているのではないかと指摘した。例えば、仕事の都合で引越しをする場合、簡単に高校も転校できると考えている。また帰国のために学校を辞めた場

合も、日本に戻ることになったときに、また同じ高等学校に無条件で受け入れられると勘違いしていたケースを伺った。筆者は相談員として現場にいた時、小・中学校での子どもたちの移動を多く見てきた。他の都道府県から転校する児童もいれば、県内や市内の学校に移動する児童もいた。その理由としては、親の転職が最も多いが、家の購入やエスニック学校からの編入などのケースもあった。

小・中学校では、引越しになった場合でも、比較的簡単に引越し先の学校に転校することができる。そのため、保護者の中には、高等学校の移動も容易いと思っているのではないかと考えられる。

また、高等学校を退学することを安易に許す保護者が多いが、退学することの深刻さ、子どもの将来にどのような影響を及ぼすのか親も理解していないのではないか。

高校からは留年制度があり、単位制であったり、コースや学科に分かれたりと、それまでに慣れていた小・中学校とは環境が一変する。相談する相手がなければ、保護者は子どもの判断に頼ることになるが、子どもにとっても新しい世界であるため、負担が大きいのが実情である。

日本社会において、高等学校の卒業資格を持つことのメリット、中卒であることのデメリットについてはっきり親に理解させる必要があるのではないかと考えられる。

IV. 必要な配慮やサポート

これまで、外国と繋がりのある若者の中途退学に関わる要因をみてきた。ここからは、退学を防ぐために、どのようなサポートや支援をしなければならないのか、考えることとする。多くの若者が自分がしたいことが明確ではないためカリキュラムに関心を持ってない、またはついていけないことからドロップアウトする可能性もある。そのため、高校入学後、適切な学力サポートや明確な展望や目標づくりを与える活動機会が不可欠となってくる。

進学にあたって行政や地域のボランティアが果たしている役割は重要であるが、今後小・中学校だけではなく、高校生も受けられる支援の場づくりを考えていく必要がある。中には支援が、高等学校に合格するまでに留まり、入学後のケアは行われない場合が多い。

筆者は高校進学の受験を控えていた若者にインタビューしたことがあるが、関わった事例では、学習支



図1. 伊賀地区外国につながる子どもと保護者の進路ガイダンス

援教室がとても大きな役割を果たしていることが確認できた。少人数であるため、支援員との間に身近な関係が作られ、様々な問題を共有できる。また生徒から信頼される存在である。(オチャンテ 2014)。家庭教師や塾に通っている者もいたが、学校での放課後の学習や土曜日行われているボランティアの学習支援教室が彼らにとって重要な役割を果たしている。先行研究では、学校外教育など外部の教育資源へのアクセスが子どもらの学習資本形成に影響していることを指摘している(中室他 2015)。筆者がフィールドワークを行った伊賀市では外国人児童生徒の進学率が高く、ボランティアの学習支援教室や塾、家庭教師などへのアクセスがしやすく、高校や大学等に進学したロールモデルも徐々に増えているようだ。

また数年前からニューカマーの外国人が集中している地区では「外国につながる子どもと保護者の進路ガイダンス」が行われるようになった(図1)。「高校や大学に進学している先輩の話が聞ける、高校の先生の話が身近に聞ける、日本語が分からない親への同時通訳が行われる」などのメリットを対象者が挙げ好評であった。

親の不安定な労働生活も中途退学に繋がる影響を与えていることを対象者の語りから分析することができた。また、経済的な理由で進学できないケースも少なくない。留学生向けの奨学金を申請することができないため、彼らも受けられる奨学金を増やすか、留学生として受け入れる制度を作るか、今後考えていく必要があるのではないか。

また、今後中途退学した若者への再出発ができるような支援を考える必要もある。高校の卒業資格がないと正社員として雇ってもらえないことが多く、「デカ

セギ」として来日した親と同じような低賃金で不安定な労働契約で働くこととなり、いつまでも貧困な生活に置かれてしまう。

V. 生徒指導の課題

高校中途退学した若者のなかには、担任の先生に相談せずに決めた事例がある。親と相談して退学することを教員に伝えたというケースが多かったが、高等学校では教員と相談する、または保護者が担任の先生と相談することもなかったというケースもある。外国人が集中している都市の公立学校では、通訳などの相談員が巡回しているため、保護者と学校の間で問題をつなぐパイプ役をしているが、高等学校の場合、通訳などの支援を受けていない所もあり、学校と保護者の間の交流、教員との繋がり、絆が小・中学校に比べると薄くなる可能性が高い。高校での教育制度やその後の進路について戸惑う保護者もいるだろう。外国籍児童生徒などのマイノリティ状態にある児童生徒の場合、高等学校側と小・中学校が連携して、そこで行われていた支援などを共有し、高等学校での学校生活に慣れるまで、同じような支援・指導を行うことによって高校での中途退学を防ぐこともできると考えられる。

また、退学した者の中には、小・中学校の時にいじめを経験したり、居場所がないと感じていた者がいる。中には不登校を経験した者もいる。小・中学校でこのような困難な体験をして「いじめを引きずっている」、またはいじめに耐えられないから自ら高校を辞めたり、親が辞めさせたりした例もある。学校側が小・中学校で適切に対応ができなかったため、学校への不信感から相談なく自主退学に繋がるケースが多いのではない。多くの場合、外国籍児童生徒や特別支援学級などのマイノリティ状態にある児童生徒はいじめの対象になりやすく、教員や学校側は普段から彼らへの目配りや適応できるまでの一層のケアを行うことが必要である。

また進路指導を行う際、キャリア教育を通して多様な職業につく可能性、明確な展望を描けるような指導を小・中学校の時から行うことによって、様々なことに興味や関心を持てるようになるのではないだろうか。これによって自分に自信を持つことに繋がるのではないだろうか。たとえ一つでも、関心のある職業や好きな科目を持つことで、夢に向かって努力しようと前向きな気持ちに繋げることができる。このような取り組みは、中途退学防止に繋がるのではないだろうか。

VII. おわりに

本稿で取り上げた事例のほとんどは日系南米人の若者についてのものであるが、彼らが抱えている問題は外国に繋がりのある若者に限るものではない。マイノリティ状態にある子どもたちの多くが、学業不振、勉強についていけないことから学校自体への無関心を感じている。また、いじめや不安定な生活環境に置かれていることで強いストレスを抱えており、それらが中途退学へ繋がるのではない。これから彼/彼女らが、日本の社会を担う一員となるためには、高校への入試の壁を低くし、誰もがアクセスしやすい学校作り、入学後のサポートを学校、保護者、行政や地域のボランティアが連携して行う必要がある。いじめや経済的な問題は、学校だけで対応するのには限界があり、彼らへのサポートは学校と行政、地域のボランティアとの連携が極めて重要になる。

今後も、不登校や中途退学など、学校への適応ができなかった外国人児童生徒の調査を続け、対象者の人数を増やしていく予定である。日本人の児童生徒の中にも同じような体験をしている者が少なくない。割合は小さいとしても、同じような要因で中途退学をしている若者もいるだろう。誰もが夢の実現に向かって学業の達成感を味わえるように、そしてグローバルな社会の中で多様な人材を失うことがないように、今後も研究し、支援を続けたい。

【引用文献】

- (1) オチャンテ 村井 ロサ メルセデス 「ニューカマーの子どもたちの義務教育後の進路選択と将来の展望」梶田 叡一 『教育フォーラム 54 各教科等の学習を支える言語活動 言葉の力をどう用いるか』 金子書房, pp.118-126, 2014 年 8 月
- (2) 宮島 喬 『外国人の子どもの教育: 就学の現状と教育を受ける権利』 東京大学出版会, 2014
- (3) 渡辺 マルセロ, オチャンテ 村井 ロサ メルセデス, オチャンテ 村井 カルロス, 小島 祥美「外国人高校生を応援する仕組みづくりへの挑戦 - NPO 法人 Mixed Roots x ユース x ネット★ こんぺいとうの実践報告 -」『ボランティア学研究』 Vol.14 pp.45 - 56 2014
- (4) オチャンテ カルロス 「三重県における日系南米人のドロップアウト問題」『平和研究セミナー論文集』 pp.95-124 2010

- (5) 中室牧子(慶應義塾大学)・石田賢示(東京大学)
竹中歩(University of Oxford)・乾友彦(学習院大学)
定住外国人の子どもの学習時間の決定要因 内閣府
経済社会総合研究所 2015

【参考文献】

- ・金井香里 「日本におけるマイノリティの学業不振をめぐる議論」 『文部科学省 21 世紀 COE プログラム 東京大学大学院教育学研究科 基礎学力研究開発センター ワーキングペーパー』, Vol.10, 1-10. 2004
- ・李原翔*・佐野秀樹 「在日中国人生徒の進学動機について東京学芸大学紀要」, 『総合教育科学系』, 63(1): pp.195-201 東京学芸大学学術情報委員会 2012
- ・宮島喬・太田晴雄編, 『外国人の子どもと日本の教育 不就学問題と多文化共生の課題』, 東京大学出版会刊, 2005 年
- ・文部科学省 生徒指導提要 教育図書株式会社 2010
- ・Suggested Reference: Development Services Group, Inc. 2010. "Truancy Prevention." Literature Review. Washington, DC.: Office of Juvenile Justice and Delinquency Prevention. http://www.ojjdp.gov/mpg/litreviews/Truancy_Prevention.pdf
- ・やまだようこ編 「人生を物語る」 ミネルバ書房 2000